

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第27回）議事要旨

1. 日時 令和2年9月23日（水）13:30～15:30
2. 場所 三田共用会議所講堂，奈良文化財研究所講堂（リモート会場）
3. 出席者（委員）

和田座長，岡林委員，小林委員，佐藤委員，里中委員，佐野委員，染川委員，高鳥委員，林部委員，三浦委員，森川委員，矢島委員，柳澤委員，（リモート）泉委員，中村委員，成瀬委員，銚井委員（事務局）

文化庁：中岡次長，豊城文化財鑑査官，伊藤文化資源活用課長・古墳壁画室長，田村文化財第一課長・古墳壁画室副室長，鍋島文化財第二課長・古墳壁画室室長補佐，平桑文化資源活用課課長補佐，宇田川古墳壁画対策調査官，青木文化財調査官，横須賀文化財調査官，森井文化財調査官，川畑文部科学技官，伊藤文部科学技官 ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：山梨副所長，早川保存科学研究センター長，秋山保存科学研究センター保存研究室長，犬塚保存科学研究センター分析化学研究室長，佐藤保存科学研究センター生物研究室長，早川保存科学研究センター修復材料研究室長，川島研究支援推進部長 ほか

奈良文化財研究所：高妻副所長，清野都城発掘調査部副部長，石橋飛鳥資料館学芸室長，内田文化遺産部遺跡整備研究室長，中島文化遺産部景観研究室長（リモート），脇谷埋蔵文化財センター保存修復研究室長，矢田研究支援推進部長，貴村研究支援推進部連携推進課長 ほか

京都国立博物館：降幡保存科学室長（リモート）

4. 概要

（1）開会

（2）委員及び出席者紹介

（3）議事

① 高松塚古墳及びキトラ古墳の保存活用について

- ・石橋飛鳥資料館学芸室長から資料2，宇田川調査官から資料3について説明があった。

佐藤委員：新施設に大きな期待を持って話を伺った。また、高松塚古墳の調査で得られた資料が観覧できるのは大変よいことである。ただ、新施設の位置づけは、保存管理だけではなく保存管理・公開・活用ではないか。また、はぎ取り展示などは迫力のある立体的な展示を目指してほしい。さらに、飛鳥資料館やキトラ古墳壁画体験館四神の館、橿原考

古学研究所附属博物館など周辺施設とうまく連携してほしい。

柳澤委員：前回の検討会から1年以上経過して、議論の前提となる今年度の目標・計画について事務局から説明してほしい。

宇田川調査官：今年度の基礎調査では、高松塚古墳に関する情報を収集し、施設の構想、計画、設計と進めてゆくうえで必要な情報を整理する。今までの検討会で、高松塚古墳壁画は保存をしっかりとしたうえで活用していくことを確認いただいているので、その前提で今後も施設名称について考えていきたい。また、周辺施設とは、明日香村が提唱する明日香まるごと博物館構想なども意識しながら、連携について考えていきたい。

伊藤古墳壁画室長：柳澤委員への回答を補足すると、今年度は資料3に基づき、検討会でご議論いただくための下準備として情報収集を行っているところである。今後、資料3に示すとおりのアンケート調査やヒアリングを実施し、ワーキング会議で論点整理を行ったのちに、次回検討会にてご議論いただきたい。

佐藤委員：新施設には、最終的に高松塚古墳壁画を元のように石室に戻すための調査研究機能を加えることを検討いただきたい。また、壁画保存に関するノウハウを蓄積し、保存科学的に世界をリードできる施設にしていきたい。

森川委員：飛鳥議連の場では、高松塚古墳壁画の新施設は当然保存の機能を有するが、公開するという位置づけを強くうたっていることを認識いただきたい。その前提で、新施設建設に向けた中期計画を明らかにしてほしい。また、基礎調査においては、高松塚古墳壁画が日本全国、世界のなかでどのような位置づけなのか、委員の意見を聞いたうえで、新施設に求める機能として加えてほしい。

新施設の立地は、特別史跡高松塚古墳周辺で保存公開すると平成28年度の検討会において確認している。飛鳥駅から近いこの地で、古墳が多数あるエリアで高松塚古墳の位置づけが示せるようにしてほしい。

矢島委員：もう一度はじめに立ち戻って検討会での議論を整理し、新施設のグランドデザインの確認が大事である。そこから、具体的な機能、保存と公開のバランス、はぎ取り資料を含めた展示室の規模が明らかになるのではないかと。

和田座長：先ほどの資料2における韓国の事例をみると、高松塚古墳博物館として世界遺産の中で重要な役割を持つ施設として活用しなければ意味がない。また、佐藤委員の発言にもあった通り、調査研究の機能を加えられるよう、予算を獲得して進めてほしい。

伊藤古墳壁画室長：委員の先生方のご意見を参考にしながら、次回検討会でご議論いただけるよう準備を進めてまいりたい。また、今後の進め方についてはしっかりとご相談差し上げたい。

- ・清野都城発掘調査部副部長および廣瀬主任研究員から資料4-1-1、内田文化遺産部遺跡整備研究室長から資料4-1-2、早川保存科学センター修復材料研究室長から資料4-2-1、脇谷埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長から資料4-2-2、高妻奈良文化財研究所副所長および犬塚保存科学センター分析化学研究室長から資料4-3、佐藤保存科学センター生物科学研究室長および脇谷埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長から資料4-4について説明があった。

里中委員：資料4-3にある泥に覆われた壁画の調査とカルサイト再結晶に関する実験について、どれくらいの期間で結果がわかるか。

犬塚室長：基礎実験は、十二支辰と思われる箇所において何かが写っているが写り方がおかしいため、現象理解のために実施している。カルサイト再結晶にかかる時間が不明であるが、来年度中には成果を出したい。また今年度は、X線撮影以外にテラヘルツイメージングや蛍光X線分析を行いたい。

林部委員：資料4-1-1における高松塚古墳およびキトラ古墳周辺地形の三次元復元について、古墳近傍だけではなく周辺の土地利用も含めた復元を是非お願いしたい。

森川委員：3点意見がある。1つ目は三次元復元、できれば全体の景観イメージがわかるものを作成いただきたい。また、完成したものをぜひ明日香村や奈良県立橿原考古学研究所に貸していただきたい。

2点目は、資料4-2-2で示される二上山産出凝灰岩の引張強度について。一般的には石材は湿度をできるだけ高く保ったほうが構造的に強いとされるが、ここで引張強度が示す意味について会議後で良いので教えてほしい。

3点目は、先ほどの文化庁次長あいさつにあった、新施設の基本構想について。報道機関に公開された検討会のなかで議論が進められているが、建設にあたってパブリックコメントなどは考えないのか。また、新施設は国営飛鳥歴史公園の近くということで進んでいるが、国土交通省との連携、だれがどの機能を受け持つかが重要である。

泉委員：資料4-3におけるX線回折分析装置の開発に伴う実験で、白色の資料として炭酸塩、鉛白をサンプルとして作成したとあるが、鉛白は真正の鉛白なのか疑似鉛白なのか教えてほしい。

早川センター長：昨年度発行の国宝高松塚古墳壁画蛍光X線分析調査データ集では、白色について「鉛系の白色顔料」としている。蛍光X線分析では、鉛系の白色顔料が鉛白（炭酸鉛）であると確定できない。ただし、発掘直後、剥落した漆喰片をX線回折分析した結果、炭酸鉛が明確に検出された結果も得ているため、実験では塩基性の炭酸鉛を仮定してサンプルを製作した。

岡林委員：昨年度、橿原考古学研究所が西壁女子群像の陶板を作成した。製作にあたって、精密な三次元計測を実施し、実物と同じ凹凸を再現した。今後は、顔料の盛り上げなどが触覚として理解できる資料として活用が可能である。

小林委員：今回報告された成果について、例えばSfMを用いた三次元復元など、高精細なモニターやプロジェクターなどで実際の成果物を見る機会を作っていただきたい。

和田座長：小林委員の発言も含めて、オンライン会議の在り方について更なる検討をお願いしたい。

- ・宇田川調査官から資料5、資料6について説明があった。

② 装飾古墳の保存活用について

- ・川畑文部科学技官から資料7について説明があった。

柳澤委員：高松塚古墳壁画修理作業室の公開から10年経過しており、また、新施設ができるまで5、6年経過するとなると、マンネリ化の傾向があるのではないかと。もう少し工夫していただけないか。2022年に壁画発見から50年となるが、デジタルデータの蓄積などを含め、可能な範囲で多くの人に見てもらえる機会を作ってほしい。

佐藤委員：熊本県の装飾古墳について、調査研究事業が令和元年度で終了したとのことであるが、石室が崩れた状況からの復旧はまだ進んでいないので、今後も文化庁として支援いただきたい。

伊藤古墳壁画室長：先ほどの森川委員の指摘で、新しい保存管理・活用施設については、次長から申し上げたとおり、今後の基本構想の策定に向けて概算要求の準備を進めている。来年度以降、検討会においてランドデザインについてご議論いただくのと一致する話である。また、国土交通省との連携は不可避であり、他の国営公園での展示施設活用方法なども含めて情報交換しながら協力して進めたい。

(4) その他

事務局から、次回の開催については令和2年度末の開催を考えており、後日、日程調整を行うことを連絡した。

(5) 閉会

(以上)